

Title	巻頭言 未知の教育
Author(s)	大木, 雅夫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-3 : 1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2654
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

未知の教育

若き日に大学恒例のクリスマス講演会に出た。前座は旧約学者で、「近代日本の担い手は下級武士たちで、私も士族の出なのでこのことを意味深く思う。」と語り始められた。講演の中身に記憶はない。次に矢内原忠雄先生が立たれ、開口一番「私は前の先生と違って平民の出身であります。」といわれた。どよめく会衆の中であって、若者はそこに本物の教育を見た。聖学院の前理事長が「平和を来たせたまえ」と祈って捕われた頃、矢内原先生は「一度はこの国を滅ぼしてください」と祈って東京大学を追われた。教授会を去る先生に付き添ったのは、大内兵衛先生ただ一人。廊下に響くお二人の淋しい、しかし愛の足音はその時は聞こえなくとも私の耳には今も響く。その学部の教授たちは、どこでどんな教育を受けていたのか。若者たちを戦場に送り続けたことを深く悔いた田邊元は、京都大学退官後軽井沢に隠棲して学問一途の道を歩んだ。どこでどのように教育されたかを問う気はない。教育の一半は自己を厳しく律して自己の人格形成にあるとも思うからである。

矢内原先生は喫茶店でも開こうかと思われたようだが、植民地政策の研究者として朝鮮を旅された。今の桜美林大学と何かゆかりのある学校で講演されたとき、校長様が「この先生は信頼できる方ですから、しっかりお聴きするように…」と生徒達に紹介されたという。「信頼できる人」とは人間に対する最高の評価として嬉しかったと語られたお言葉は、今も私の耳朶に響く。今のソウル大学は帝国大学だったが、さる教授は軍刀をさげてキャンパス内を闊歩していたという。しかし敗戦後帰国して書いた本はすべて民主主義伝道の書だったという。これはドイツで知り合ったソウル大学教授から直接聞いた話である。威張りすぎた学者は、信頼できない。富士には月見草、教育者には謙虚さがよく似合う。自信に満ち溢れた教師ほど困りものはない。そもそも自信と実力は別物ではないか。

昔は紅顔の少年も、今は白頭の翁となった。しかし教育とは何か。それは今も私の課題である。権威あるものの如くに語りうるのはイエス・キリストのみであり、人間の教えの当否は教えられる側にとって課題となる。幼時また若い頃耳にしてから何年も、何10年も折々に思い出されることは正しい教えだと思うから、それは大事にせよと、私は学生に語る。超一流と自他ともに任ずるところにも、石は多く玉は少ない。

若き日に、今もお慕う恩師に出会った。「学者は学問で勝負しなければならない。」それはある学者が他の学者についてしきりに悪声を放っていることが話題になった時のお言葉であった。「君は片隅のことにだけこだわらず、比較法の大道にはいれ。」それは、私がイタリアの刑法思想とソ連刑法典との継承関係を書いて修士号を取った直後の教えであった。その後50年の私の比較法原論研究は、ここに始まった。「怒るべき時に怒らないような者は男でない。」これは親友の若き助教授が教授会の席上、上司たるいささか怪しげな学科長を弾劾した後で、わが友の勇気を褒められたお言葉であった。師のお名前は江川英文先生。葦山の代官で卓越した科学者江川太郎左衛門英龍の嫡孫であり、今は士族の貴族のという時代ではないが、Noblesse oblige（位高ければ徳高くあれ）を地で行くような忘れえぬ師であった。私には夢がある。心あらば読者は、いつの日にか若者の肩を抱いて、わが師の教えを伝えてほしい。教育はそこにあると思うからである。